

身近な羊歯植物たち

シダ植物を左手に、ルーペを右手に持って、シダ植物の鱗片や胞子のう群や胞子のう群を包む包膜をじっくりと見てください。じっくりと見て、さらに眼をこらして、もっともっとじっくりと見つめてみるのです。そうすると、いつの間にやら頭がトランス状態に陥って、、、原始の地球に戻っていく気がしませんか？試したことのない人はぜひ試してみてください。理屈では説明できないシダやコケのおもしろさというのは、そうした原始の地球の雰囲気にあるのかもしれません。

かつて、石炭紀（3億4500万年前～2億8千万年前）にできた大森林は、シダ植物（木生シダ）のリンボクやロボク（いずれも絶滅種・しばしば化石で発見される）のなかまが主役でした。今では考えられないほどシダ植物が隆盛だった時代があるのです。今の多くの種子植物の原型になった

原裸子植物類と言われる一群は、この時代にはまだ地球上に現れたばかりの植物の一群でした。このとき地球上はすでにシダ植物の天下だったのです。

現在、日本全国にシダ植物は630種あまりあると言われています。石炭紀に主役を張ったヒカゲノカズラのなかま（リンボクなど）やトクサのなかま（ロボクなど）はずいぶん小型化して、現在ではシダ植物の中でも小さな一群です。しかし、種類が少ないといっても、スギナ（ツクシ）はトクサのなかまですし、ヒカゲノカズラは「日陰」などといって、生け花でよく使われるなど、人間の身近な存在であることは特筆しておくべきことかもしれません。

「こんなふうになると、身近なシダなんてそんなにいっぱいあるの？」という人もいるかもしれません。そういう人は、春先の食卓を頭に思い浮かべてみてください。山菜として、蕨（ワラビ）や薇（ゼンマイ）は誰でも一度くらいは口にしたことがあるのではないのでしょうか？こんなふうに言うと、「え？ワラビやゼンマイもシダのなかまなのですか？」という人もいるかもしれません。食卓にならぶ山菜としての蕨、薇は、先端がグルグル巻きになっていると思いますが、この特徴は多くのシダに共通なのです。あのグルグル巻きは、シダ植物の若芽で、これらが成長した姿は食卓の上で見るときとは似ても似つかない姿をしています（図1）。

山野にワラビやゼンマイ、コゴミ（クサソテツ）などを探しに山菜とりに出かけたことのある人は、3～5月頃に真っ赤になるクルッと巻いたシダの若芽を見たことはないのでしょうか？「あれ？これも蕨かし



図1 ワラビの成葉



図2 ベニシダの成葉

ら？」と思った人がいれば、その見方は大正解。ワラビやゼンマイと同じシダ植物で、ベニシダという種類(図2)です。ベニシダは、春先の美しさやその強さから、日本庭園などで多く植えられているシダで、庭園で使われるだけでなく、山野にも多いシダです。このシダ植物の成葉は多くの人が「これこそシダ植物だ」と思っている姿そのものでしょう。シダを漢字で「羊歯」と書くことがありますが、これは葉が細かいことから来ている言葉だそうで、ベニシダも小さい葉をたくさんつけます。ベニシダはオシダ科という科に区分されていますが、このなかまは、大変見分けがむずかしく、種類も多いので、かなり細かい観察眼が必要となります。ベニシダを始めとするほとんどのシダは、森の木の下に多く出現します。これらは林床植物といって、よく森の環境の指標(目安)になることがあります。林床植物が多様な森は、森としての環境が良好と言ってもいいかもしれません。

シダ植物はほとんどが林床や岩の上などの湿った環境を好むので、乾燥した森にはあまり出現しません。また、都市内の多くの場所は乾燥していることが多く、スギナやホシダのように道ばたに出現する種類を除けば、シダ植物は多くありません。しかし、それでもちゃんと都市環境に適応している種もいます。湿った場所のある溝やドブを見つけて入り込んでいるのが、ヤブソテツやオニヤブソテツ(図3)、イノモトソウなどで、まちなかでも見られる代表的な「雑草のシダ」と言えるでしょう。特に、岸和田は海に近い場所に都市が広がっており、海岸植物のオニヤブソテツがよく出ます。岸和田湾岸線に近い場所で、溝の上に鉄板が敷き詰められていれば、その鉄板をちょっとめくってみてください。一面にオニヤブソテツが群生していることがあります。オニヤブソテツのぶ厚い葉は濃い緑色で、光沢があって美しいので、切り花や園芸にもよく使われる風流なシダですが、一面、ドブの汚水にも適応できる強さを持っています。ヤブソテツもオニヤブソテツによく似た種ですが、色はやや薄く黄緑色で、葉はオニヤブソテツに比べ薄く、羽片の先端に鋸歯(ギザギザ)があることなどで見分けられます。

もう一種類挙げたイノモトソウ(図4)は学名を*Pteris multifida*と言います。属名の*Pteris*(プテリス)はよくイノモトソウ科イノモトソウ属の園芸種の商品名になっていて、お花屋さん

に売られています。日本に自生しているマツザカシダ*Pteris nipponica*も同じ属の植物で、美しい白斑のものがよく売られていますが、商品名はマツザカシダではなく、やはりプテリスとされていることが多いようです。元来、日本人は園芸品としては外国物が好きなようで、プテリスという名前にだまされて、外国物だと思っている人もいるかもしれませんが、しっかり日本に自生している種だったりするのです。もちろん、イノモトソウ属の園芸種には外来のものもあるようで、さがせばいろいろな珍品もあるのかもしれませんが、しかし、同じ*Pteris*なら、まず近所の溝に行き、*Pteris multifida*を観察すればよいでしょう。小さいし、なんだかみすぼらしいからイヤだな—という人がいらっしゃれば、岸和田の山野にたくさん生えているオオバノイノモトソウ*Pteris cretica*はどうでしょうか？これは、大型で翼(よく)のない種で、なかなか美しい種です。スレンダーでシャープな感じのするボディーは、なかなか風流ですよ。

園芸種ということ言えば、アジアンタムやタマシダがおなじみですが、アジアンタムということばは、プテリスと同じように、属名(ホウライシダ科ホウライシダ属)で、実際にはさまざまな品種があるようです。アジアンタムとして売られているもので最も多く見られるホウライシダ*Adiantum capillus-veneris*は江戸時代に日本で園芸種として持ちこまれたもので、自然で見られる種は多くが園芸種からの逸出と考えられています。タマシダは、日本では、静岡県、紀伊半島、四国、九州の沿岸部に自生している種で、岸和田で見られるものはすべて園芸品です。セイヨウタマシダ



図3 オニヤブソテツ



図4 イノモトソウ

という外来種も園芸種に使われているようです。

他にもまちなかで見ることのできるシダはスギナ、ホシダ、ノキシノブ、トラノオシダ、イヌケホシダなど、挙げてみると案外たくさんあることが分かります。シダ植物のような原始的な植物は、どこか遠い世界の存在に思われがちですが、実は身近な場所でもたくさん観察することができるのです。

(図の引用・参考)『葉によるシダの検索図鑑』誠文堂新光社；『日本の植生図鑑(Ⅰ) 森林』保育社；『改訂増補 牧野新日本植物図鑑』北隆館

(自然資料館学芸員 村上健太郎)

史跡めぐり

積川神社(積川町)

牛滝川に宮川が合流する地点に鎮座する積川神社は、延喜式内社の一つで、その創建は崇神天皇の時と伝えられていますが、もともとは牛滝川上流の水利にかかわる神を祭った社であったと考えられます。平安時代中期以後、大鳥神社(堺市)・穴師神社(泉大津市)・聖神社(和泉市)・大井関神社(泉佐野市)とともに和泉五社の一社とされました。



積川神社

五社の制度は10世紀以後地方政治が国司に一任されるようになり、国司が任国に赴いて主要な神社を巡拝したことから関わり、国内神社の序列化が進められた結果成立した神祇制度で、更には惣社が定められ、五社の祭神を一社に合祀して簡略化しました。和泉国の惣社は、国府に近い泉井上神社(和泉市)とされました。中世までは、毎年8月15日の祭礼の際には積川神社はじめ五社の神輿が惣社に集まり、放生会などの神事が行われていました。また積川神社の神輿は岸和田浜の御旅所へ渡御し、潮かけの神事も行われていました。近世以後は潮かけ神事のみが断続的に続けられていたようですが、当社には淀君が寄進したという神輿が伝わっています。

この他、当社の本殿は豊臣秀頼が再興した桃山建築の粋をこらした建築で、国の重要文化財に指定され、また、本殿に祭られた8体の男女神像(鎌倉時代)、白河院宸筆と伝える扁額も大阪府指定文化財です。

郷土資料館の資料から

蝦夷国風図巻

アイヌ人の衣服や生活習慣、熊祭り(イオマンテ)の様子などを和人の視点で図解した絵巻です。江戸時代中期以後、蝦夷地(北海道)への関心が高まるとともに、こうしたアイヌ民族の生活風習を記録した絵画が多く作られるようになりました。

この絵巻は、大阪安治川口で船宿を営んだ淡路屋に伝わっていた資料の一つで、北前船交易などに関わる海運業者の北方への関心の高まりを示しています。



蝦夷国風図巻

(郷土史資料室学芸員 山中吾朗)

○● INFORMATION ●○

◆郷土資料館の催し案内◆

春季特別展 「佐々木勇蔵コレクション 短冊優品展Ⅱ―俳諧―」

泉州銀行や学校法人泉州学園の創立者である佐々木勇蔵氏の短冊コレクションのうち、今回は榎本其角・服部嵐雪ら蕉門十哲や、与謝蕪村・小林一茶など近世俳諧の短冊約180点を紹介します。

【会期】平成14年3月28日(木)
～5月26日(日)

【会場】岸和田城天守閣1階展示室

【時間】午前10時～午後5時
(入場は4時まで)

【入場料】大人400円／小中学生200円
＊25名以上団体3割引

【交通】：南海本線蛸地蔵駅下車徒歩7分

【休館日】4/22(月)・5/13(月)・20(月)

【記念講演会】

5月11日(土)午後2時～ 於だんじり会館
永野仁氏(大阪経済大学教授)
「佐々木勇蔵さんと短冊」
聴講希望者は郷土資料館までお申込み
ください。無料。

【お問い合わせ】：

岸和田市立郷土資料館(岸和田城)

TEL:0724(31)3251

岸和田市教育委員会郷土史資料室

TEL:0724(23)9689

◆きしわだ自然友の会

発足のお知らせ◆

平成14年4月から「きしわだ自然友の会」が発足します。この会は、きしわだ自然資料館とともに協力し、活動していく団体です。自然のこともっと学びたい、自然に興味のある人たちと関わりたい、そんなあなたの入会をお待ちしております。

■入会金:無料

■年会費:

個人会員 2,000円(中学生以上)

家族会員 3,000円

特別会員 10,000円

■会員特典:

- 1:友の会主催の行事に参加できます。
- 2:友の会誌「メランジェ」が送付されます(購読料は会費に含まれます)。
- 3:自然資料館の入館料やミュージアムショップの商品が割引になります。

■お申し込み方法

2002年3月16日13:30より、直接来館して、お申し込みください。3月16日以降、自然資料館開館時に、随時受付いたします。メールやFAXなどでの申し込みについては、現在準備中です。

◇4-5月の友の会主催の行事予定◇

4月21日:蕎原の自然観察会

5月:和歌山友が島観察会

※くわしくは下記のホームページをご覧ください！

※お願い [from M]は、学校教職員に1部ずつお配りください。担当の方はお忙しいところ申し訳ございませんが、よろしくお願い申し上げます。

【from M】では、みなさまのご意見、ご感想、ご質問等をお待ちしております。博物館での学習、研究等に関する情報、地域の自然環境や歴史に関する面白いトピックスなどがありましたら、投稿文の方も受け付けております。お名前、連絡先、所属等をご記入の上、下記のところまでお送りください。電子メールでも受け付けております。なお【from M】はホームページ上でもご覧になることができます。ぜひご利用ください。

連絡・問い合わせ先

〒596-0072 岸和田市堺町6-5

きしわだ自然資料館

TEL (0724)23-8100 FAX (0724)23-8101

Email: knature2@sensyu.ne.jp

k-nature@sensyu.ne.jp

k-nature@mk.city.kishiwada.osaka.jp

自然資料館ホームページURL:

<http://www.sensyu.ne.jp/k-nature/>

Yahoo Japanの検索で「きしわだ」と入力すれば、カンタンです)